

1 はじめに

先日、昭和60年の岩手大会の様子を掲載した新聞記事のコピーを手に入れた。私が水沢高校3年に在籍していたこの年、水沢高校が逆転に次ぐ逆転劇で決勝まで上り詰めた大会である。

当時私は大学受験を控える身であったことと、中1から甲子園大会を楽しみに見ていたはずなのに、自分の高校進学と同時に「高校球児」があまりにも身近な存在になってしまったためか、高校野球への関心が冷めてしまっていた。実のところ、観戦に行った決勝以外は、この年の水沢の快進撃の記憶がないのである。

そんな薄情な私でも、毎年夏の大会を迎える頃になると、母校野球部のユニフォームや応援の和太鼓の音が無性に懐かしくなる。甲子園のある県・兵庫に住まうようになったことも、また一つの要因となって、昭和60年の水沢高校の戦い振りを知りたいと強く思うようになった。

もう18年も昔の話であることと、岩手を遠く離れてしまっているので、当時の資料が入手しにくくなってしまったが、上記の新聞記事と、私のあいまいな記憶をつなぎ合わせて、あつかましくも、ご紹介させていただくことをお許しください。

2 背景

2.1 高校野球的「昭和60年」

昭和60年といえば、5季連続甲子園大会出場の桑田、清原のいたPL学園が有終の美を飾った年である。

岩手ではその前年(59年)金野(きんの)投手を擁した大船渡のセンバツ4強入りに大いに沸いた。当時の岩手は、現在のように私立高校が県大会の上位を占めるような時代ではなく、強い私学といえば、一関商工(現・一関学院)、花巻東が挙げられる程度で、専大北上、生活学園(現・盛大付属)などは、単なる「県大会出場チームの一つ」に過ぎなかった。

実際、一県一代表制になった昭和53年以降だけを見ても、ほとんど公立高校が選手権代表の座を占めている。私学と公立の力の差がなかったというよりは、まだ私学が、選手の勧誘を含めて、さほど野球に力を入れて取り組んでいなかった頃である。

2.2 胆江地区の悲願

水沢高校には水沢市内の中学のみならず、隣の江刺市、胆沢郡、金ヶ崎、平泉、米崎、千厩あたりからも生徒が集まってきていた。入試の時には当然ながら、水沢市内からの受験生よりも若干得点が必要であったと聞いたことがある。水高の野球部にも水沢以外の出身者が多く在籍していた。江刺市出身のある選手は「水高で野球をしよう！」と友人と励ましあいながら受験勉強にいそしんだという。

もちろん、胆江地区には他にもたくさんの高校があるのだが、どの学校も、こと野球となると、なかなか県の上位に上がっていかない。沿岸の学校や、旧制中学の流れを汲む学校が強かったからだ。昭和60年当時、岩手にある13の市のうち、春夏通じて甲子園への代表校を出していないのは釜石(第68回センバツ大会出場で達成)と水沢、江刺の3市ではなかっただろうか。

そんな中、昭和43年、55年と岩手大会で準優勝。胆江地区から初の甲子園出場の悲願を果たすのは水沢高校であろう、と地区住民の期待が寄せられ、水沢近隣の市町村から甲子園出場への希望を抱いた生徒達が集まっても何の不思議もない。

しかし、私が1年のときの昭和58年、2年在籍の59年の岩手大会では2、3回戦で敗退していたような記憶がある。「水高の野球部はそんなに強くない。」私はそういう印象を強くもっていた。

2.3 水沢高校第33代応援団リーダー

水高の応援団リーダーはバンカラである。弊衣破帽、腰には手ぬぐい、裸足に下駄履き、女子かと思うほどの長髪。もちろん、リーダーだけでなく、バンカラにしている生徒もたくさんいた。

毎年7月には2年の男子から応援団リーダーを選ぶことになっていた。定員は10名。選挙で信任されれば、夏休み中に一つ上の代から養成といわれる訓練を受け、正式にリーダーとしての活動をしていくことが許されるわけである。

33代目のリーダー選は難航した。締め切りを過ぎても立候補者が出ず、痺れを切らした3年生リーダーから2学年の集会で「とにかく出せ！！」との催促されるほどであった。夏休み明け、8名の立候補者が出た。定員を割ってしまったことでかなり批判もあっただろうが、彼らは養成も受け、その後は順調に活動を展開していった。異色だったのは、当時の慣例で団長はハゲにすることになっていたのだが、33代目の団長はそれを嫌い、ぼろの学生服も着なかった。代わりに、副団長がハゲにしていた。

また、この代のリーダーの中には、それぞれが所属するクラブの中心となるべき人員がいたので、それまではリーダーはどのクラブにも所属できなかったのだが、これ以降は所属が許されるようになったのではなかっただろうか。

3 大会にあたって

3.1 岩手大会開催にあたって

この大会は当時史上最多の85校が参加し、地区予選を経て51校が県大会へ出場した。夏の大会の運営方法が今とは違ったのであろうか、夏も確かに地区予選があつてから県大会の手順で行われていた記憶があるが、詳しくは分からない。県大会では、この年からシード制が導入され、開催地推薦校を除く春季県大会の出場校13校は2回戦からの登場となり、シード校同士の対戦は3回戦以降とされた。

応援についてもこれまでとは異なり、「自校チームが守備の時はブラバン、太鼓等の使用を慎むように」との指示が各学校応援団に伝えられた。しかしこの指示は、大会日程が進み、各学校の応援合戦が白熱してくるにしたがつて下方修正されるなど、一貫性を欠いたようだ。

3.2 大会日程

昭和60年の岩手大会は51校の参加のもと、7月20日開幕、同月28日決勝の9日間の日程で、岩手県営球場、盛岡市営球場、紫波町営球場の3球場で行われた。50試合を3球場でこなすため、3つの球場でほぼ毎日のように3試合が行われ、県営球場にいたっては大会第2日と準々決勝の日は4試合、第1試合は8時開始で行われた。

3.3 組み合わせ

前述した通り、春季県大会出場校の13校はシードされ2回戦から登場。

第1ブロックには春季県大会を制した大船渡工のほか、盛岡第三、大東がシードされて入った。他に花北商、宮古、盛岡工など。

第2ブロックは、シード校の一関第一、専大北上、福岡、盛岡第四が入った。後に水沢と決勝を戦うことになる福岡の緒戦は大会第4日(7月23日)千厩と久慈農林との勝者と紫波町営球場で試合と決まった。

第3ブロックは春の準優勝校・久慈と、宮古北、花巻東がシード。他には花巻北、黒沢尻工、黒沢尻北、釜石南が入っている。

第4ブロックは水沢、宮古商、盛岡第一、盛岡市立がシード。ここには生活学園(現・盛岡大付属)、前年の岩手大会の優勝校・大船渡、準優勝校・一関商工(現・一関学院)が入った。

水沢の緒戦は大会第5日(7月24日)、県営球場で生活学園と一関商工との勝者との対戦と決まった。

3.4 もう一つの「校歌」

私が高校に在籍していた当時、水高では「校歌」といえば、あの、絶叫調の校歌をさしていた。団長のタクトに合わせてひたすら吠える校歌は、応援の時だけでなく各種学校行事でも行われ、本来の楽譜通りのテンポで一般生徒が校歌を歌う機会は卒業式の校歌斉唱のときだけではなくなかったかと思われる。(それでもかなりの生徒が絶叫気味に歌っていたのだが)

ただし、音楽部(合唱部)では、ピアノ伴奏つきの混声四部合唱に編曲された校歌を歌っていた。岩手大会開幕前、音楽部が野球部の依頼で校歌の演奏を録音していた。もちろん、試合に勝つと、試合後に校歌が流されるからなのだが、くじの関係で水高が試合をするのは、全て県営球場となっていたので、音楽部員達は色めきたった。高校野球はテレビ、ラジオともに、県営球場からの中継が主になるからだ。テレビで自分達の演奏が流れるかもしれない・・・密かに期待していた。

4 一・二回戦の記録

4.1 岩手大会第1日(7月20日)の試合結果

1回戦

花北商 1 - 2 宮古 水沢商 7 - 0 久慈・山形 花泉 0 - 9 盛岡工
大原商 0 - 10 花巻北 宮古工 4 - 14 遠野 黒沢尻工 8 - 0 竜沢
黒沢尻北 1 - 6 盛岡南

4.2 岩手大会第2日(7月21日)の試合結果

1回戦

久慈商 6 - 3 一関工 金ヶ崎 5 - 6 花巻農 浄法寺 6 - 9 大槌
福岡工 3 - 8 釜石商 千厩 11 - 5 久慈農林 釜石南 4 - 5 盛岡商
生活学園 0 - 10 一関商工 前沢 0 - 7 盛岡北 沼宮内 8 - 5 広田水産
大船渡 6 - 4 水沢第一

4.3 岩手大会第3日(7月22日)の試合結果

1回戦

盛岡第四 0 - 7 水沢工 久慈工 3 - 0 住田

2回戦

久慈 6 - 7 花巻北 大船渡工 9 - 1 宮古 水沢商 1 - 8 盛岡工
盛岡第三 20 - 13 久慈商 大東 5 - 3 花巻農 一関第一 6 - 2 大槌
専大北上 9 - 2 釜石商

4.4 岩手大会第4日(7月23日)の試合結果

2回戦

遠野 8 - 10 黒沢尻工 宮古北 2 - 5 盛岡南 花巻東 10 - 0 盛岡商
宮古商 4 - 3 盛岡北 盛岡第一 17 - 3 沼宮内 福岡 7 - 0 千厩
水沢工 3 - 0 久慈工

5 一・二回戦の記録 (水沢, 一関商工に快勝)

5.1 岩手大会第5日(7月24日)の試合結果

2回戦

盛岡市立 0 0 0 1 0 0 1 0 1 = 3 (本)荒川(盛)
大船渡 0 0 0 1 0 0 0 0 0 = 1

試合序盤は盛岡市立, 大船渡ともに得点圏に走者を進めるものの後続がたおれた。4回に先制を許した大船渡は4回裏の攻撃, 無死二, 三塁の好機がありながらも1点を挙げるに止まった。盛岡市立の左腕・引屋敷は強打の大船渡打線を6安打1失点に抑える好投。9回には荒川の本塁打で止めを刺した。

敗れた大船渡・佐藤監督は, 「今年のチームは, 何かにつけて昨年(センバツ4強入りしたチーム)と比べられた。かわいそうだった」と選手達を慰めた。

水 沢 2 0 0 0 1 4 4 = 1 1
一関商工 0 0 1 0 0 0 1 = 2 (7回コールド)

水沢は昨年夏準優勝の一関商工に先発全員安打の17安打を浴びせ快勝した。
一関商工は水沢の右横手投げの小川の低めに制球された球を打ちあぐんだ。

各成績

水 沢 3 4 打数 1 7 安打 1 1 打点 三振1 四球1 三塁打1
二塁打5 犠打4 盗塁6 併殺0 残塁6 失策3
一関商工 2 6 打数 4 安打 2 打点 三振3 四球1 二塁打1
犠打1 盗塁0 併殺0 残塁5 失策1

3回戦

大船渡工 3 - 8 盛岡工

盛岡工は、同点に追いつかれた5回、主砲・菅原の3点本塁打で勝ち越し。

大東 1 0 - 0 盛岡第三(6回コールド)

盛岡三のエース・武藤の不調が大誤算。8四死球に被安打8と自滅。

一関第一 4 - 3 専大北上

専大北上・村上が、岩手大会では21年ぶりとなる2打席連続本塁打でリードしたが、小刻みに迫った一関一が9回に勝ち越した。一関一のスタンドには伝統のライオンの旗が登場。相手校のファウルボールでもあたらうものならば、「何するんだ!!」の声に応援席から飛び出すほどであった。

福岡 2 - 0 水沢工

福岡・斎藤幸、水沢工・渡辺両左腕による投手戦は、9回に福岡・中田に2点本塁打が出て決着。

花巻北 2 - 9 黒沢尻工(8回コールド)

エース・星を攻守ともにもり立てた黒沢尻工が快勝。

この日まででベスト8のうち5校が決まり、一関第一、福岡、大東、盛岡工、黒沢尻工が名乗りを挙げている。

5.2 緒戦の結果に見る水沢高校

当時の水沢がどのようなチームであったのか、緒戦(一関商工戦)の成績から探ってみたい。先発全員安打を記録したことから分かるように、打撃のチームといえよう。打席順に、選手の紹介もかねて、この日の打撃について。

- 1 番・千葉右翼手は4打数3安打と、この試合当たりに当たった。
- 2 番の小笠原遊撃手はレギュラー唯一の2年生。
- 3 番・佐藤克二塁手は三塁打を打った。
- 4 番を打つのは捕手で主将の佐藤工。二塁打も1本放っている。
- 5 番は大友中堅手。勝負強い打撃をする。
- 6 番は男沢一塁手。佐藤克、佐藤工、大友とともに、この試合で2安打。
- 7 番はエースの小川。打撃も好調。
- 8 番は高林三塁手(選手紹介にも掲載されていなかった)も2安打。
- 9 番は小野寺左翼手。163センチの小柄ながら二塁打1本。

また、盗塁も多いのがこのチームの特徴だろうか。水沢のエース・小川は右の横手投げ。この試合、四死球は1と、制球重視の投球。しかし3失策の守備には課題が残った。

大会前の選手紹介からベンチ入り20名の選手の出身地は、水沢8名、江刺3名、小山1名、南都田1名、若柳1名、前沢3名、衣川1名、金ヶ崎1名、猿沢1名。学年別では3年生10名、2年生10名。

体格面では、176センチのエース・小川ががっしりとした体つきをしていて、このチームでは一番長身だが、レギュラーの平均身長は170センチ前後と小柄な選手が多い。

6 岩手大会第6日(7月25日)の試合結果

3回戦

花巻東3 - 2 盛岡南

シード校の花巻東の先発・佐藤観が不調で盛岡南に先取点を許す苦しい展開。8回に逆転するが、9回には同点に追いつかれるなど、最後まで盛岡南に食い下がられたが、その裏、一死三塁の好機で適時打が出てサヨナラ勝ち。

水 沢 0 3 2 0 0 0 0 2 0 0 0 0 0 3 = 1 0
 盛岡北 1 1 3 0 0 0 2 0 0 0 0 0 0 0 = 7 (延長14回)

前半、両チームとも、失策を絡ませて3回までに5点を取り合う乱戦の様相を呈したが、中盤からは水沢・小川、盛岡北・浅沼両エースが立ち直った。

5 - 5 で迎えた7回、盛岡北は無死一、三塁から2適時打で2点を挙げたが、粘る水沢は8回、二死一、二塁から4番佐藤工の三塁打で同点に追いつき、延長戦にもつれ込んだ。

盛岡北は9回一死二塁、10回一死一、二塁、12回一死二塁と再三サヨナラの好機を作り押し気味に試合をすすめた。13回も一死二、三塁と水沢を攻め立てた。水沢は満塁策をとって迎えた打者は4番の浅沼。水沢、絶体絶命のピンチに、マウンドヘナインが駆け寄り、小川投手を激励。小川は期待にこたえ、浅沼を捕邪飛、続く5番中野を投飛に打ち取ってこの回を切り抜けると、14回の水沢の攻撃では3安打と四球などで3点をもぎ取り、岩手大会史上最長(当時)となる4時間3分の熱戦にピリオドを打った。

水沢は試合序盤に記録には出ないものも含めて守備の乱れが多かった。

各成績

水 沢 4 1 打数 1 4 安打 7 打点 三振 2 四死球 1 1 三塁打 1
 二塁打 1 犠打 9 盗塁 1 1 併殺 1 残塁 1 5 失策 2
 盛岡北 4 8 打数 1 4 安打 7 打点 三振 8 四死球 8 犠打 6 盗塁 0
 併殺 1 残塁 1 3 失策 4

盛岡第一 0 0 0 0 0 0 0 0 0 = 0
 盛岡市立 0 0 0 1 0 1 0 2 x = 4

盛岡市立は盛岡第一の右腕・畠山の緩急をつける投球に苦労しながらも中軸の荒川、引屋敷が打線を引っ張り辛勝した。盛岡市立の引屋敷は球威、制球とも今ひとつで、毎回のように走者を出しながらも味方の好守備に支えられて完封した。

これで8強は全て出揃った。準々決勝の組み合わせは以下の通り。

- 第1試合 盛岡工業 X大東
- 第2試合 一関第一 X福岡
- 第3試合 黒沢尻工業 X花巻東
- 第4試合 盛岡市立 x水沢

7 岩手大会第7日(7月26日)準々決勝の試合結果

県営球場で行われた準々決勝は、各校応援団や熱心な高校野球ファンが見守る中、この夏最高の暑さのもと、熱戦が繰り広げられた。

第1試合 盛岡工業4 - 3大東

盛岡工業はソツのない攻撃で着々と加点。7回には大東打線から5長短打を浴び、3 - 3の同点に追いつかれたが、8回の攻撃、二死三塁から、この日3打数3安打と大当たりの藤沢が右中間二塁打を放ち、勝ち越し。

第2試合

一関一 0 0 0 0 0 0 1 1 0 = 2
福 岡 2 0 0 0 1 0 0 1 x = 4

この年の春季大会4強、選手権では12年ぶりに8強入りを果たし、古豪復活を目指す一関一、8強常連の福岡、野球部創部がともに明治34年の名門校同士の対戦。一関一・佐藤、福岡・斉藤幸は好左腕。両チームの打線も好機を確実に点に結びつける勝負強さがあり、力は互角と見られていた。

一関一は初回の攻撃、一死満塁の好機でスクイズを失敗。結局、強攻策に出て併殺を喫し、先制できず。その裏、外野にまずい守備(記録上は三塁打)が出て2点を奪われ、主導権を渡してしまった。

5回も内野エラーが出て追加点を許し、1点差に追い上げた8回は、またも内野の乱れで突き放された。春季大会からの課題であった守備はそれほど整備されておらず、足元をすくわれた。

逆に福岡は試合運びにうまさがあった。鉄壁の守備に加えて、当たっている奥堂を1番に抜擢、4番に中田をすえるなど打順の入れ替えが成功、奥堂は2安打、中田が1安打2打点と期待通りの活躍を見せた。

また、県北と県南の伝統校同志の対戦とあって、応援合戦も盛り上がった。福岡のOB約20人は三塁側に陣取り、56年卒業の応援団OBのリードのもと後輩達に声援を送った。

各成績

一関一 28打数 5安打 2打点 三振5 四死球5 三塁打1 犠打2
盗塁0 併殺0 残塁6 失策2
福 岡 27打数 5安打 3打点 三振1 四死球4 三塁打1 二塁打1
犠打3 盗塁1 併殺1 残塁6 失策1

福岡高校オーダー

1・C 奥堂，2・SS 西舘，3・P 斉藤幸，4・3B 中田，5・1B 安田，6・CF 中屋敷，7・LF 工藤，8・2B 斉藤隆，9・RF 小船

第3試合 黒沢尻工 4 - 5 花巻東(延長 11回)

黒沢尻工が先制したが，花巻東は2回に同点，5回には4 - 3と勝ち越した．しかし，黒沢尻工も8回に同点とし，今大会4度目の延長戦にもつれ込んだが，延長11回に花巻東は二死一塁から岩田が右中間二塁打し，サヨナラ勝ちした．

第4試合

盛岡市立	5 0 0	0 0 0	0 0 2	= 7
水 沢	2 0 2	0 1 2	1 0 x	= 8

5点をリードされた水沢は1回，5番・大友の二塁打などで2点を返し，3回は4番・佐藤工の三塁打とスクイズなどで2点を加えて1点差とした．追い上げムードに乗った水沢は5回にスクイズで同点．6回にもスクイズを決めて逆転に成功，さらに適時打で差を広げた．

盛岡市立は9回，5番・三好の右中間三塁打，6番・久保の内野安打などで1点差にまで追い上げ，なお二死二塁．しかし7番・佐々木が右飛に倒れた．

水沢のエース・小川は立ち上がり不調で，初回到5長短打を浴び，いきなり5失点するものの2回以降立ち直り，下位打線をきちんと抑え，強力な中軸につなげなかった．盛岡市立はエース・引屋敷の制球が定まらず苦しい投球．痛めていた肩が1週間ほど前に痛みが取れたばかりで，まだ肩が重かった，と不調の原因を明かした．

各成績

盛岡市立	3 5 打数	1 2 安打	7 打点	三振 4	四死球 6	三塁打 2
		二塁打 2	犠打 2	盗塁 4	併殺 1	残塁 9
		失策 3				
水 沢	2 5 打数	7 安打	7 打点	三振 4	四死球 8	三塁打 1
		二塁打 2	犠打 8	盗塁 5	併殺 1	残塁 9
		失策 0				

よって，準決勝の組み合わせは以下の通り．

第1試合 盛岡工業 X 福岡

第2試合 花巻東 X 水沢

8 岩手大会第8日(7月27日)準決勝の試合結果

盛岡ではこの夏最高を記録した前日(26日)を上回る33.7度を記録。県営球場は熱戦の熱気とあいまって暑さも最高潮の一日であった。

第1試合

福岡 300 410 0 = 8
盛岡工 100 000 0 = 1 (7回コールド)

福岡は初回、制球の定まらない盛岡工先発の飛沢を攻め、一死一、三塁から4番中田、5番安田の適時打で3点を先制。その裏、盛岡工は二死一、三塁で主砲・菅原が三遊間を破り1点を返すものの、以降は福岡のエース・斉藤幸の伸びのある速球とカーブを内外角へ投げ分けるうまみのある投球の前に打線が沈黙。

福岡は4回、無死から連続の四死球で出た走者を3番斉藤幸が右翼線二塁打して2点を挙げ、飛沢をマウンドから引き摺り下ろした。救援のエース・佐々木守も後続を抑えることができず、中田に右翼超え三塁打、安田にも右前打の猛攻でこの回計4点で試合を決定付けた。

盛岡工はエース・佐々木守にかえて野手兼任の飛沢の先発が誤算。捕手出身の盛岡工・村松監督は「(1月にひじを手術していた)エース・佐々木守が不調と聞いて直前に飛沢先発を決めた。自分の手でボールを受けてみてから決めればよかった」と悔やむ。雫石中学のエースとして県大会優勝投手になった佐々木守投手は変化球の多投からか、高校入学時にすでにひじが曲がっていた。救援のこの日もドクターストップぎりぎりの状態での登板であった。村松監督は「でも、85人の部員を背負って1番をつけているから、最後は彼に任せた」と続けた。

各成績

福岡 25打数 8安打 7打点 三振1 四球10 三塁打1 二塁打1
犠打2 盗塁2 併殺0 残塁8 失策0
盛岡工 23打数 4安打 1打点 三振2 四球3 二塁打1 犠打1
盗塁0 併殺2 残塁5 失策2

第2試合

水 沢 0 1 0 0 0 2 0 1 1 = 5
花巻東 2 2 0 0 0 0 0 0 0 = 4

序盤は花巻東のペース。初回、失策と内野安打などで劣せず迎えた無死二，三塁から3番岩田の三遊間安打と5番佐藤真の左犠飛であっさり2点を先制。2回も一死二，三塁から2番高橋浩の右前適時打で2点を追加。しかし、失策などでなお一死二，三塁としたが、スクイズ失敗，三塁走者が挟殺されて突き放せなかったのが最後まで響いた。

追う水沢は3点差で迎えた6回，無死満塁から内野ゴロとスクイズで2点，8回は4番佐藤工，5番大友の連続二塁打で同点とした。

3回以降立ち直った水沢のエース・小川に抑えられていた花巻東は8回，失策などで無死二，三塁の好機を迎える。が，6番佐藤伸の左飛は水沢の左翼手・小野寺寛のワンバウンドする絶妙の本塁送球で犠飛とはならず，三塁走者が本塁で憤死。続く槻田も遊撃後方へ打つも，小笠原遊撃手のグラブをかすめた球は小野寺寛左翼手の頭に当たり，それをカバーに入っていた大友中堅手が捕球するという，非常にアンラッキーな形で後続が倒れ，勝ち越せなかった。

9回，水沢は二死一，二塁から重盗を試みて花巻東・畠山捕手の悪送球を誘い出だして二塁走者の小野寺寛が生還して勝ち越した。

花巻東・伊藤監督は「水沢との練習試合で5 - 0で勝っていたので，今日も7，8点とって勝てると思っていた」と語った。

各成績

水 沢 2 8 打数 9 安打 4 打点 三振 4 四球 4 二塁打 3 犠打 7
盗塁 3 併殺 1 残塁 7 失策 4
花巻東 3 1 打数 6 安打 4 打点 三振 4 四球 4 二塁打 1 犠打 3
盗塁 3 併殺 1 残塁 7 失策 3

これで決勝は福岡と水沢の対戦と決まった。

9 決戦を前に

9.1 回想

当時の水沢の野球応援は，応援団リーダーのもと，1，2年生が学年ごと交互にバスで応援に行っていた。3年生は一部の野球応援に燃える猛者達を除いてたいていは，夏休みに入ってから毎日行われる受験対策講座への出席のため，野球応援には行かないのが普通であった。

3年に在籍していた私は、上記の理由と「水高の野球部はさして強くない」との先入観から、この年の野球応援にあまり関心が向かなかった。しかし、準々決勝での、初回の5失点をひっくり返しての勝利は、自室で聞いたラジオ放送で知って「まさか!？」と驚いた記憶があり、それ以降、野球部の動向がなんとなく気になり始めていた。

準決勝のこの日、私はどうしたことが、テレビで試合を見ていた。自宅ではない。友人等とともに学校にいた。学校でテレビが見られる場所・・・、もちろん、職員室である。

試合は終盤に入っていた。水沢のエース・小川が力投している。低め一杯を狙って投じた球をボールと判定されて苦笑する小川。実況アナは言う。「う～ん、あれが低いのか、という表情です、小川。いやぁ～、このピッチャーは窮地にあっても、いつもニコニコしていますねえ～」このアナウンサーの言外に「水高は勝てない」との雰囲気を感じ取っていたのは私だけではなかったはずだ。小川はこの回、粘り強い投球で切り抜け攻撃へ。

かつてのクラスメイトが打席に立っていた。お昼休みにパンを買いに走る姿や、校舎内で先輩に大きな声で挨拶し、深々と頭を下げていた姿を知っている私にとっては全く想像も出来ないような険しい表情。打席を外してベンチのサインを伺うところなど、もう、やたらめったらカッコいいのである。ヘルメットのひさしの作る陰で顔が半分見えないというのも、相乗効果を発揮している。私は思わずつぶやいた。「・・・サギだ・・・」

冗談はさておき、彼はこの打席でも勝負強さを発揮する。彼が野球部であることは知っていたが、運動部に所属する生徒の一人(A君が野球部だと言うのなら、B君はサッカー部だし、C子さんは陸上部のエースで公欠の女王だし、D子さんはバスケット部で遠征のたびにお土産を買ってきてくれるし、E君にいたっては仏典だし...)という程度の認識しか持っていなかったもので、私は彼と野球のことなど一度も話したことがなかった。彼はこんな「選手」だったのか。教室の座席が近かっただけで、特別親しかったわけではなかったのだが、私の知らない彼の一面に驚いた。

最終回、花巻東の攻撃を抑え、勝利に沸く水沢ナイン、そしてスタンド。人影まばらな職員室も留守番部隊の先生が「勝った、勝った」と手をたたき。県営球場では勝利の校歌を誇らしげに歌うナイン。混声四部合唱の校歌はバンカラ応援の校歌とも違った感激があり、テレビを見ていた私の胸にも響くものがある。と、隣にいらっしゃった先生が「で、お前は一体何の用なんだ?」「あっ、失礼しましたぁ～」とそそくさと帰る私。

職員室のテレビは翌日の試合について伝えていた。「あ、明日、決勝なんだ・・・」試合日程も全く知らなかった私は呆然とした。「明日、どうしよう・・・」

9.2 福岡，水沢の各成績

福岡，水沢両チームの準決勝までの成績は以下の通り。

福岡

〔打撃成績〕

114打数 35安打 18打点 三振3 四球22 盗塁6，失策1

打率.307

〔投手成績〕斉藤 幸

投球回32 被安打15 奪三振28 与四死球12 失点3 自責点3

防御率0.84

福岡の決勝進出の鍵は3つあった。

一つは打順の組換えが成功したこと。今大会，斉藤隆，西舘，奥堂，斉藤幸，中田，中屋敷，工藤，日向，小船のオーダーで臨んだが，準々決勝で1番に奥堂を起用，二番以降を西舘，斉藤幸，中田，安田，中屋敷，工藤，斉藤隆，小船に変えている。1番を打つ主将の奥堂は打率.429に4盗塁。エースで3番を打つ斉藤幸は.417，4番の中田は.571，5番の安田は.429で，中軸3人で14打点を挙げている。

二つ目はエース・斉藤幸の好投。左腕投手特有の右打者内角膝元への速球，両コーナーへのカーブと的を絞らせない。4試合で12与四死球と制球も安定。自責点も3と，自滅の可能性はない。

3つ目は鉄壁の守備。今大会前も約2週間，OBが選手一人につき，連日200本捕球ノックで鍛え上げた。夏に強い福岡の伝統である。

水沢

〔打撃成績〕

134打数 47安打 29打点 三振11 四球23 盗塁25 失策9

打率.351

〔投手成績〕小川

投球回39 被安打36 奪三振19 与四死球19 失点20 自責点17

防御率3.92

ダークホース的な存在で勝ち上がってきた水沢は乱戦に強い。4，5点の失点もものともせず取り返す粘りがある。1番の千葉は打率.462，盗塁7と好機を作る。3番佐藤克は.389に6盗塁，4番佐藤工は.333，5番大友は.438と好調。好機にタイムリーも出る。長打も出るが，ここ一番というときにはスクイズで確実に点を取りに行く緻密さもある。

横手投げの小川は立ち上がりに不安があるが、尻上がりに良くなり、コーナーをうまく投げ分ける。接戦に耐える精神的スタミナも十分。

水沢の不安要因は9失策の守備。記録に現れないミスもあり、つけ込まれる隙は大きい。

9.3 福岡X水沢, 3つの因縁

福岡と水沢の対戦にはいくつかの因縁がある。

一つは、よく知られている通り、この年の5年前、昭和55年の岩手大会決勝でも福岡と水沢が対戦、後にプロ入りする欠端投手を擁した福岡が、好投手大槻を擁する水沢を2 - 1で下して優勝している。水沢にとって悲願の甲子園初出場の前に立ちふさがったのがまたしても福岡、となった。

二つ目は、福岡、水沢両チームの宿舎が同じホテルであったこと。福岡が長年の常宿としていたところへ、1年前から水沢も利用するようになった。同ホテルでは、決勝の前に出すことにしているうなぎを両チームにサービスしたという。

三つ目。福岡・佐藤利行監督は水沢高校出身。昭和43年、水高が初めて岩手大会決勝に駒を進めたときの捕手で主将であった。東北学院大卒業後教師になり、58年から福岡高校に勤務。対する水沢・斉藤諒監督は福岡高校出身。日体大卒業後47年から10年間、母校・福岡高校を指導し「常勝・福岡」を作り上げ、上記の昭和55年、水沢を破って優勝した時の監督である。57年から水沢高校に勤務。佐藤、斉藤両監督は、くしくも、日ごろ鍛えたナインを率いて母校と対戦する事となったのである。

9.4 決戦前夜

福岡首脳陣は緊迫した作戦会議に時間を費やした。一方、水沢首脳陣はサインとともにいつもどおりの夜。決戦の日を前に両監督は対照的な夜を過ごした。

10 決勝の記憶・・・水高全校応援で決勝に臨む

10.1 英断

また私の個人的な回想をお許しいただきたい。

決勝戦の朝を迎えた。3年生は当時、大学受験に向けた特別講座出席のため、応援団リーダーや、一部の応援に燃える勇者たちを除いては、野球の応援に行かないのが常であった。ことにこの日は、大学から教授をお招きして1日一杯を使って講義を受ける「大学講座」の最中で、日曜日にもかかわらず、岩手大学教育学部から国語の教授においでいただくことになっていた。3年生の多くが受講するため、講義は学校ではなく別会場が用意されていた。

私は、野球応援が気になっていた。聞くところによると、1、2年生は9時ごろすでにバスで県営球場に向かったらしい。私は会う友人誰かれなく、「今日、決勝だよ」と言っていた。友人も「そうだね」とは言うものの、それ以上の会話は続かなかった。国語の大家といわれる教授に、わざわざ盛岡から来ていただくのだ。決勝といえども、応援に行ける訳がない。

講座は予定通り始まった。クーラーの効いた大きな会場で、教授はマイクを片手に一度の休憩を挟んで現代文を終え、古文を半分終えかけたところで11時30分頃だったろうか。

何の前触れもなく教授が演壇を降りられた。代わって学年主任の先生が登壇され、「今日、野球部は決勝だ。応援に行きたい者はバスの手配がないので列車で行って良い」旨が伝えられた。全く予期しない先生方の英断であった。試合開始には間に合わないまでも、全校応援が許された瞬間である。迷っている時間はなかった。昼食もそこそこに、確か、水沢駅を12時30分前後に発車する各駅停車に乗って行ったと記憶している。

どのくらいの3年生が応援に駆けつけたのかは覚えていないが、とにかく列車は水高生で一杯だった。私は、勝って優勝歌を歌うことだけを考えていた。この一戦に勝てば甲子園だ。5年前に甲子園への行く手を阻んだ福岡に雪辱する歓喜の瞬間をこの目で見届けるのだと意気込んでいた。

ふと、連投になる小川投手のことが気になった。甲子園大会でも日程が進んでいくと連投による疲労から、制球がままならなくなったりするではないか。私の近くに小川投手と同じ中学出身の友人がいた。「小川君、3連投になるけど、スタミナ、大丈夫かな?」「ああ、あいつはゴリラみたいなやつで、スタミナだけはあから、大丈夫」友人は笑って言った。

この時、福岡は水高より1日連戦が少なかったことだけは、私も知っていた。あるいは、小川君は4連投だったかな?とも思っていたのだが、実際は3連投、4連投どころの話ではなかった。5連投であった。しかも、この暑さの中、緒戦から決勝まで連続5日間で5試合を戦っていたのだ。

盛岡駅到着後は県営球場までバスが手配されており、私たちはそれに乗って応援に駆けつけた。決勝戦はすでに序盤の攻防を終えていた。

1 1 決勝の記録・水沢の悲願・・・三たび叶わず

1 1 . 1 岩手大会第9日(7月28日)決勝

〔スターティングオーダー〕

先攻は水沢

1 番 RF 千葉、2 番 SS 小笠原、3 番 2 B 佐藤克、4 番 C 佐藤工、5 番 CF 大友、6 番 1 B 男沢、7 番 P 小川、8 番 3 B 高林、9 番 LF 小野寺寛

後攻の福岡

1 番 C 奥堂、2 番 SS 西館、3 番 P 斉藤幸、4 番 3 B 中田、5 番 1 B 安田、6 番 LF 工藤、7 番 CF 中屋敷、8 番 2 B 斉藤隆、9 番 RF 小船

真夏の日差しが降り注ぐ岩手県営球場。決勝戦の試合開始は13時。一塁側に福岡、三塁側に水沢が座る。審判は、球審 杉山、塁審 村松、船場、森の4氏。

〔試合経過〕

1 回、水沢は三者凡退。

福岡は2四球と2盗塁で二死一、三塁。が、後続が倒れて無得点。

2 回の水沢、二死から6番男沢が中前打するも得点ならず。

福岡は、この回先頭の6番工藤が三塁線突破の二塁打で出塁、7番中屋敷の送りバントで三進後、8番斉藤隆の投前スクイズで先制。

追う水沢は3回、無死から、5試合連続スタメン出場の1年生・高林が右前打で出塁、福岡のエース・斉藤幸の悪投で2進。9番小野寺寛が送って一死三塁。1番千葉が浅い左飛に倒れ二死三塁。2番小笠原の遊ゴロは失策を誘い、三走高林が生還し同点。

福岡は二死から3番斉藤幸が右中間三塁打を放つが、続く4番中田が右飛に抑えられ無得点。

4 回の水沢，一死後，5 番大友が二塁強襲安打を放つも後続が倒れ，無得点．
福岡も一死後，6 番工藤が右中間二塁打するが得点ならず．

5 回，水沢は一死から 9 番小野寺寛が三前内野安打で出塁するが，けん制で
一，二塁間挟殺．1 番千葉も三振に倒れ，無得点．
福岡はこの試合初めての三者凡退．

6 回，水沢は 2 番からの攻撃も，二度目の三者凡退を喫する．
福岡は先頭の 3 番斉藤幸が左前打で出塁．4 番中田が遊ゴロエラーで無死一，
二塁．5 番安田の投前バントは水沢のエース・小川の野選を誘い，無死満塁．
小川投手は絶妙の牽制で三走斉藤を刺し，6 番工藤を投ゴロにしとめ二死二，
三塁．次打者，7 番中屋敷は前日のミーティングで指示があったとおり，外角
の直球一本に的を絞っていた．カウント 2 - 1 からの 4 球目，水沢・斉藤監督
の指示は「外角へ外せ」．小川 - 佐藤工の水沢バッテリーも了解しての投球はス
トライクゾーンに入ってしまう．中屋敷がたたき返した球は一二塁間をゴロで
抜け，中田，安田が続いて生還．2 点を勝ち越す．

7 回，水沢は 3 度目の三者凡退．
その裏，福岡は一死から 1 番奥堂が左前打．しかし，後続が倒れ無得点．

8 回も水沢は三者凡退．
福岡は二死後，6 番工藤が左翼線安打で二進を試みるが，水沢の小野寺寛左
翼手の好返球で二塁で憤死．

9 回，水沢は最後の攻撃．2 番小笠原に代えて代打千田．しかし，投ゴロに
倒れ，続く 3 番佐藤克も右飛で二死．4 番・主将の佐藤工は四球を選び，すか
さず二盗で二死二塁．続く 5 番大友は左前打で二死一，三塁．しかし 6 番男沢
が遊ゴロに倒れ，15 時 17 分，試合終了．

水 沢	0 0 1	0 0 0	0 0 0	= 1
福 岡	0 1 0	0 0 2	0 0 x	= 3

各成績

水沢

3 1 打数 5 安打 0 打点 三振 6 四球 1 犠打 1 盗塁 1 併殺 0
残塁 5 失策 1

小川

投球回数 8 打者 26 投球数 104 被安打 7 奪三振 1 与四死球 2
失点 3 自責点 2

福岡

26 打数 7 安打 3 打点 三振 1 四球 2 犠打 5 盗塁 2 併殺 0
残塁 6 失策 1

斉藤幸

投球回数 9 打者 31 投球数 127 被安打 5 奪三振 6 与四死球 1
失点 1 自責点 0

11.2 最後の打席，最後の応援

決勝戦の観戦，応援が許された3年生が県営球場にたどり着いた頃，試合はすでに序盤の攻防を終えていた．1 - 1の同点になっている．これまでにない試合展開に私は驚いた．もっと乱打戦になると踏んでいたのである．水沢のエース・小川が走者を背負いながらも踏ん張っている．「小川君，心配していたほどじゃないな．大丈夫．あとは打線が爆発するのを待つだけだ」

しかし，福岡のエースも6日間で5試合を戦っているものの，連投の疲れを感じさせない投球である．四球すら出してくれない．水沢は6，7，8回と連続しての三者凡退．各打者のカウントを全く覚えていないのだが，ぽんぽんと追い込まれてしまったからなのか，早いカウントからの積極打があだになったのか，ことごとくいい様に打たされている．私は水沢各打者の淡白な攻撃に不安が募ってきた．

何より，福岡の守備が崩れない．これまでの水沢の戦い方といえば，試合中盤から相手投手の疲れや守備のミスに乗じて得点してきた印象があり，隙のない守備を見せる福岡に舌を巻いた．

6回，福岡に2点のリードを許したまま，相手投手にしがみついてもなく試合はどんどん進んでいく．自チームのエースは再三のピンチを背負う．私は水沢の逆転を祈る一方で「福岡とは力の差がある．この試合で私は最後の応援になるだろう．せっかく野球応援に来たのだ，悔いを残したくない．最後はインディアンコールで水高ナインを応援したい」との思いが強くなっていった．これまで再三の逆転劇を後押ししてきたであろうインディアンコールを聞く機会もないまま決勝を終わるのは，ナインにとっても不本意であろう．

9回もすでに二死．しかし，水沢はここから粘りを見せる．4番で主将の佐藤工が四球で出塁，盗塁，安打で二死ながら一，三塁のチャンス．

リーダーがインディアンコールを告げる。私は1秒でも長く、できるだけ長くインディアンコールが続くことを願っていた。球場に鳴り響く和太鼓が心地よい。同学年のリーダー達は定員を割りながら、決勝という最高の舞台で、しかも全校応援の指揮を執れるとは、リーダー冥利に尽きるだろう・・・そんな思いもあった。必死の応援もむなしく、次打者男沢が倒れ、水沢の快進撃は終わった。

試合終了後、福岡の校歌を聞き、エールの交換をしていたことまではなんとなく覚えているが、私には閉会式の記憶がない。おそらく、3年生は即刻帰宅させられたからだろう。

11.3 戦いのあとに・・・

決勝が終わった。

優勝し、10回目の甲子園出場を決めた福岡高校ナインは午後9時前から旧国鉄北福岡駅で優勝祝賀会に臨み、同駅前から金田一駅まで約8キロをパレード。駅前広場には約三千人の熱狂的な市民らの歓声で沸き返った。

準優勝の水沢高校ナインは午後7時30分過ぎ、バスで同校に到着。父母や関係者約二百人が出迎えた。その後校内の大会議室で慰労会が行われた。

12 おわりに

母校・水沢高校が準優勝した昭和60年夏の戦いを知りたい、そしてまた、誰かに伝えたいとの思いから、ここ2週間ばかりこちらの掲示板に当時の新聞記事をもとにつづらせていただいた。

経費の都合で、1,2回戦は試合結果のみの掲載になったが、当時の岩手の高校野球の全体像はどうであったか、また、その中で水沢はどんな戦いをしたのかをとらえるため、水沢の試合結果だけでなく、他校についてもできる限り試合経過や各成績を載せ、具体的にチームのイメージができるようにしたつもりである。

またこれとは別に、全く個人的な感傷から、私の記憶もあわせて書き残させていただいた。試合を伝える新聞記事を手にしながら、18年も前のことを結構良く覚えていたものだ、我ながら驚いてしまった。

今年も甲子園大会へ向けた地方大会の季節が近づいてきた。鍛えられたプレー、名将による采配、チーム作り、プロから注目される選手など、今年も見所はたくさんあるだろうし、これから先もそうだろう。が、クラスメイトが出ている高校野球を応援できる機会は私にはもうない。そういった意味で決勝まで勝ち進んでくれた当事の水沢ナインには感謝している。